

■ 巻 頭 言 ■

年 頭 に あ た っ て

所 長 一 色 貞 文

昭和 46 年の年頭にあって、所感を記してご挨拶に代えたいと思います。

全国的に拡がった一連の大学紛争の火の手も一応収まり、代わって大学改革が関係各方面で日程に上るようになってから、二度目の新年を迎えることになりました。紛争中における学生の具体的な要求は大学によって異ってはいましたが、共通していえることは学生の権利の主張、すなわち学生参加にあったはずで、しかし現在、個々の大学や関係各機関で行なわれている論議は、学生参加の前提になることとはいえ、大学における教育と研究と管理のあり方に集中されています。そして大学における附置研究所の位置づけということが大きな問題としてとりあげられてきましたが、これは学生がほとんど関心を示していなかった事柄です。

われわれ研究者がわが国の学術研究体制全般に深い関心を払っていることは申すまでもないことですが、わけでも東大内における本所の位置づけという問題には主体的に正面から当たっていかなければならない重大事です。しかし大学改革の実施にはなおかなりの時間を要するでありましょう。その間、改革待ちで手をこまねているわけにはいきません。

生研は 26 年前に工学と工業の間隙を埋める総合工学研究所という性格で設置されました。生研が誕生した契機には、第二工学部の廃止ということがあった事実はありませんが、このことは本所が設置される必然性があったことを否定するものではありません。第二工学部が生研に転換するに際しては、豊富な人材は幸にしてその大半を受けつぐことができましたが、物的財産としては前者の校舎と設備が譲られただけで、研究所の新設には当然必要とされる施設や設備は何一つ面倒をみてもらうことがありませんでした。しかし諸先輩ならびにわれわれ研究者は上記性格の研究所の必要性を深く認識し、歯を喰いしばって努力を続け今日の生研を築きあげてきました。そして社会の要請には十分応える成果を挙げてきたと自負しています。しかしその成果の多くは、個々の研究者が属するそれぞれの学問分野に関するものや、比較小人数の共同研究に属するものが多く、研究所として重点的に行なったのは、宇宙航空研究所が設立される以前

のロケット研究のような少数の場合に限られています。したがって、個々の研究者の業績はそれぞれの学界で高く評価されながらも、生研全体の評価は必ずしも正当になされていない感があります。

本所では現在委員会を設けて将来計画を再検討していますが、設立当初の設置目的は現在においてもその大筋を変更する必要はないものと判断しています。しかし、学部における研究と研究所におけるそれとの違いは何かという問いに関連して、本所では幾つかのプロジェクト研究を並行して実施する必要性も感じられます。そのような観点から、「都市における公害と災害の防除」を題目とした総合研究をとりあげ、予算要求をしています。細目としては、都市構造物の耐震強度、都市交通に関する公害防除、都市廃棄物に関する公害防除の3つであり、これらはいずれもすでに基礎研究が進められており、それらを一つの目的に向ったプロジェクト研究に発展させようとするものです。公害を問題としたのは決して時流に乗って予算を取ろうとするものではなく、その動機は工業の発展に伴って生じた歪みに対して、われわれの関心が薄かったのを反省した結果であります。また研究の狙いとしては、短期間に一応の結果が期待できるような対症療法的な問題を避け、やや長期的な視野に立って、幅広く応用の効くような問題と取り組むことにあります。このような態度で研究ができるのは大学において他にはなく、また大学附置研究所の使命の一つはそのような目標をもった研究を行なうことにあると考えます。

大学においてプロジェクト研究を行なうことには問題もあります。プロジェクト研究ということになれば、かなり広い分野にわたる多数の研究者が一つの目的達成のために集中しなければなりません。一方研究者は次に行なう研究の芽を常に育てていなければなりません。もちろんプロジェクト研究の中から新しい研究の種が生まれることもありましょうが、基礎的な研究から新しい応用研究が生まれるのが一般的といえます。したがって研究者個人のレベルで、プロジェクト研究と基礎的な各個研究を時間的にどのように配分していくべきかという点に、今後十分検討を加える必要があるといえるでしょう。

(1970 年 11 月 10 日受理)